

2階のリビング。室内のスペースを1坪削ってデッキを広く取ったことで、外に向かって広がりがありました(湯浅氏自邸/P.3~4の写真すべて)



2階のデッキ。隣家側には目隠しのフェンスも設置。落ち着いてくつろげるアウトドアリビングになっています。

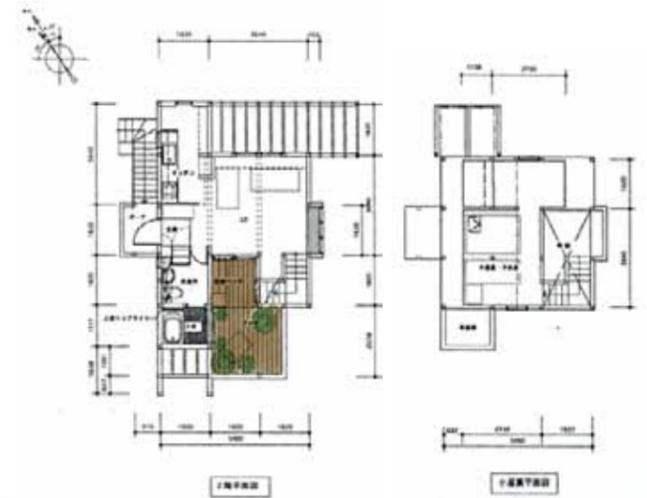


どこまでが室内でどこからが戸外かわからない曖昧な空間。デッキと室内を気軽に行き来できる自由さと開放感が魅力。



シンプルでナチュラルな外観。木製のラティスやパーゴラなどで道からの視線をさりげなく目隠し。2階の左側が写真のデッキ部分です。

建具を引き込むと、
開口部が完全にオープンになって
室内と戸外とが一体化します。
床レベルも同じで、
裸足で気軽に出られます。



建具は全部引き込めるので、引き込むと開口部が完全にオープンになって、室内と庭とが一体化します。広いデッキには2カ所に穴を開けて、もともとあった木を残しました。

この木は落葉樹(モミジ)で、夏場はほどよく日陰をつくってくれるので涼しく、冬は落葉するので部屋まで明るい光が入ってきて、暖かい日だまりをつくってくれます。まさに、家の中に居ながら、庭を楽しめるのです。

「内」と「外」の境界を曖昧にすると人は自然と外に出ていく

庭がなくても、外を取り込むことはできます。たとえばわが家の2階のリビングダイニングルームですが(上の写真)、あえて部屋の一角を1坪分だけ凹ませて、その分をデッキスペースにあてています。普通は少しでも部屋を広く取りたいため、こういうことはあまりやらないんですが、実はこの1坪分の空間が非常に効いています。部屋は狭くなっているはずなのに、逆に、むしろ非常に広がりを感じるのです。

外の部分はウッドデッキです。ウッドデッキのメリットは、何かに履きかえたりしなくても、素足で気軽に出やすいということ。しかも室内の床と同レベルにしたので、室内の延長の感覚で、外に出るという意識がありません。

窓を開けると、どこまでが室内で、どこからが戸外かわからない曖昧さ。こんなふうな、内と外との境界を曖昧にすると、人はごく自然に外に出ていくものです。

真夏の暑いときなど、子どもたちは、ここから足だけデッキに投げ出して寝ころんだりしています。ちょっと行儀は悪いですが、これ、ものすごく気持ちがいいんです(笑)。

この階にはクーラーがありませんが、四方に風が通るように設計したので、夏でも快適に過ごせます。デッキ部分には一部に軒もありますので、雨の日に洗濯物も干せて便利です。

道に面した部屋は、窓の外に格子を張って視線を遮りながら、外の緑を楽しむ

広い庭が望めない都市部の住宅などでは、プライバシーを守りながら「外」をほどよく取り込む工夫も必要です。たとえば、A様邸(P.1の写真)は、道に面した門の正面の位置に和室があります。この和室を締め切った部屋にせず、できるだけ外を感じられる場所にしたい…というご要望に応じて、和室の窓の前面を細い縦格子で覆いました。道からの視線を遮りながら、風も通り、表庭の植栽も楽しめます。

この格子は建築の一部としてつくられたものですが、建物に組み込まなくても、後付けでラティスやフェンスなどを取り付けたり、あるいはパーゴラを立ててつる植物をからませるなど、さまざまな目隠しのアイデアがあると思います。

また、エクステリアメーカーから、建物に合うナチュラルな木質系のスクリーンや目隠し部材などがいろいろ出てきていますので、そういったものを利用してもいいですね。

外だけでなく、中だけでなく敷地全体を「どう使いたいのか」考えて

エクステリアやガーデンプランナーのみなさんに心がけていたきたいのは、外だけでなく、内だけでなく、空間全体を考えながらプランするという事です。

室内からの見え方であったり、どこから外に出るか、室内と外をどうつなげるかなど、実際にお客様が「庭をどう使いたいのか」を考えることが大切です。そして、お客様と庭との接点をできるだけ多くしてあげる工夫をしていただきたいと思います。

とはいえ、エクステリアを設計する時点で、もう建築工事が終わっていることが多く、庭のことをあまり考えずに設計された建物もあって、エクステリアを担当する立場としてはストレスを感じる場合もあるのではないのでしょうか。

たとえば、うちで庭だけを設計したお宅で、庭に面した部屋に腰高の窓しかないというケースがありました。これでは気軽に庭いじりができません。幸いまだ建築途中だったので、「ここから出られるようにしてください」と、窓の一つを掃き出し窓に変更してもらい、庭への出入りができるようになりました。

庭を設計するさい、早い時点で建築図面などをもらっていたら、こういった変更もきく可能性がありますので、なるべく早期の段階から話し合いに加わるのが理想です。



ゆあさ・つよし
湯浅 剛 一級建築士

- 1965年 大阪府生まれ
- 1988年 京都工芸繊維大学工学部建築学科卒業後株式会社一色建築設計事務所入所
- 1992年 同退社後英国留学
- 1994年 グリニッジ大学ランドスケープ学科卒業
- 1995年 妻・景子とともにアトリエ六曜舎設立 住宅とランドスケープの設計を中心に活動

(社)日本建築家協会会員
昭和女子大オープンカレッジ講師(97~03年)
法政大エクステンションカレッジ講師(98~05年)
著書「ガーデンデザイン入門」(農文協)ほか

次の「庭と建物をつなぐもの <後編>」は、「庭で何をしたいのか」と題して、団楽、回遊、読書…楽しみ方に合わせた庭づくりのヒントを伝授します。お楽しみに!